

河角龍典先生との思い出

110

三 枝 暁 子

河角龍典先生と初めてお会いしたのは、二〇〇五年四月初めに開催された、文学部総合プログラムの専攻会議の場であったと記憶している。この年、総合プログラムには、湯川笑子先生・佐々充昭先生・田中省作先生の三名の専任教員と、河角先生・私の二名の任期制講師が新たに着任・所属することとなり、その顔合わせを兼ねた専攻会議であった。当時の私は、職を得ることのできた喜びを感じつつも、新たな環境のもと、うまくやっていけるのか不安でいっぱいだった。そのようななか、ほぼ同世代で、共に「イノベーションプログラム」を担当する任期制講師、という立場にある「同志」のような存在と出会えることができたのは幸運であった。「同志」と言いながらも、実際は、温厚で常に周囲への配慮を欠かさぬそのお人柄に甘え、様々なことを教えていただくばかりで、助けていただくことの方がはるかに多かった。幸いにも、二〇〇八年にまず私が、その翌年には河角先生が、それぞれ公募への再チャレンジを経て専任教員になることができたが、「任期つき」の教員として常につきまとう不安をこぼし合い励まし合える「同志」の助けがあったからこそ、希望をもって働き続けることができたように思う。

二〇〇九年から、ともに京都学プログラム（現京都学専攻）の運営に携わる教員として、それまで以上に顔を合わせ、授業の設計や中身作り等について話し合う機会が多くなった。特に思い出深いのは、地域連携を重視する京都学プログラムの一つの目玉ともなったインターンシップ授

業に対する取り組みを一緒に行ったことである。河角先生が宇多野ユーホステルを研修先とするインターンシップ授業を、また私が西之京瑞饋神輿保存会を研修先とするインターンシップ授業を担当することになった。合同で事前研修を行ったり、ユースホステル宿泊者を瑞饋神輿の見学に誘う企画を練ったりするなど、コラボレーションを楽しんだ。瑞饋神輿作りの夜なべ作業を見学に来てくださった河角先生と受講学生と、帰りがけにラーメンを食べながら他愛のない話をして笑いあったことや、先生のみならず、直美夫人とお子さん二人も出来上がった瑞饋神輿を見に来てくださったことなど、懐かしく思い出される。一方で、立ち上がった専攻を軌道にのせていく過程には様々な苦難もあったなか、二〇一〇年から京都学プログラムに配属となった、これまた同世代の加藤政洋先生と三人で、鴨川のほとりや西陣の居酒屋で飲みながら励まし合ったことも懐かしい。河角先生と加藤先生は、沖縄調査にもよく一緒に出かけしており、自分もぜひ混ざってほしいと言いながら、三人で一緒に沖縄へ出かける機会をついに失ってしまった。

二〇一四年の初夏、この年の一二月に京都工芸繊維大学で開催されることになっていた都市史学会大会の大会実行委員をつとめることになり、河角先生にぜひコメンテーターとして御登壇いただきたいと依頼した。御快諾いただいて少ししてから、病が再発されたことを知った。しかしその後も先生の意志は変わらず、一〇月の打ち合わせの場にも直近

の調査データを持参しながら参加してください。地理学のみならず古学や歴史学とも容易に接点を持ちうる研究内容を、画像データによって示す研究方法は鮮やかで、大会の懇親会では様々な分野の研究者が先生のもとへ足を運んでいた。その様子が思い出されるにつけ、今さらながら、専攻業務や教育という場でのコラボレーションを楽しみながらも、肝心の「研究」という側面で、河角先生とのコラボレーションを十分果

たせなかったことが悔やまれる。先生は最期まで、病への不安を研究と教育への情熱に昇華させながら生きておられた。その命は、学問の中で今後もし生き続けるはずであり、その命に学びながら京都研究を続けていきたいと思う。

(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)